

Title	名目勘定の意味：会計学の基本問題〔V〕(2)
Sub Title	The meaning and significance of a nominal account
Author	友岡, 賛(Tomooka, Susumu)
Publisher	慶應義塾大学出版会
Publication year	2022
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.65, No.1 (2022. 4) ,p.13- 23
JaLC DOI	
Abstract	「実在勘定」および「名目勘定」の名をもって [ 実在勘定vs. 名目勘定 ] と捉え、分類することの意味は奈辺にあるのか。この問いをめぐって思量する。
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-20220400-0013">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-20220400-0013</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 名目勘定の意味

—— 会計学の基本問題〔V〕(2) ——

友 岡 賛

### <要 約>

「实在勘定」および「名目勘定」の名をもって「实在勘定 vs. 名目勘定」と捉え、分類することの意味は奈辺にあるのか。この問いをめぐって思量する。

### <キーワード>

埋め草, 仮想勘定, 勘定, 結果, 原因, 实在, 实在価値, 实在勘定, 資本, 純資産, 損益計算書項目, 貸借対照表項目, 二面的把握, 非实在, 複式簿記, 負債, 分類, 名目, 名目勘定

### 名目勘定

概して以下のように説明されようか。

勘定は「实在勘定 → 名目勘定」の順に生成をみ、实在勘定には人名勘定（人的勘定）と物財勘定（物的勘定）があり、まずは人名勘定が生成をみ、したがって、勘定は「人名勘定 → 物財勘定 → 名目勘定」の順に生成をみ、名目勘定の生成をもってすべての取引を二面的に把握することができるようになり、したがって、複式簿記の必要条件が充たされる。

名目勘定の生成前の世界を考えてみるに、例えば人にカネを貸したとか、あるいは商品を仕入れたといった取引の場合、[(借方) A氏への貸付金 XXX / (貸方) 現金 XXX] とか、あるいは [(借方) 商品 XXX / (貸方) 現金 XXX] といったように实在勘定（のみ）をもって二面的に把握することができようが、しかし、例えば使用人に賃金を支払ったという取引の場合には [(借方) ? XXX / (貸方) 現金 XXX] となり、二面的に把握することができず、名目勘定の生成を待つこととなる。

### <引用について>

原文における（ ）書きや太文字表記や圈点やルビの類いは、原則として、これを省略した。したがって、引用文におけるこの類いのものは、特に断りがない限り、筆者（友岡）による。

また、引用に際して、旧字体は、原則として、これを新字体に改め、促音や拗音の類いが小文字表記されていない場合は小文字表記に改め、漢数字は多くの場合、算用数字に改めるなどの加筆を施している。

さて、いまさらながら、そもそも名目勘定とは何か。  
まずは辞典の類いをサーベイしてみよう（刊行順）。

「その勘定残高が各会計年度末に留保利益へ振替えられる勘定：このように呼ばれる理由は、この種の勘定が完了した取引または費消原価を示すからである：収益または費用勘定：<sup>1)</sup>実在勘定の反対語」（エリック L. コーラー（Eric L. Kohler））。

「実在勘定に対する概念であって、価値の入・出そのものではなく、価値の入・出の原因・種類・内容など名目的な事柄を示す勘定をさす。具体的には、収益勘定（ないし利益勘定）と費用勘定（ないし損失勘定）がこれに属する。収益・費用勘定は営業活動による資本の増加・減少を示し、それゆえ資本勘定の従属勘定・下位勘定である、と理解するのが一般的であるが、これは適当ではない。資本勘定は実在勘定の一つであり、収益・費用勘定は名目勘定であって、両者はその性格を根本的に異にするものだからである」<sup>2)</sup>（安平昭二）。

「実在勘定に対する勘定概念で、具体的には損益勘定をさす。したがって、名目勘定は、費用勘定と収益勘定（もしくは損失勘定と利益勘定）の二つから成る。名目勘定という語が損益勘定に適用されるようになったのは、損益勘定が、実在勘定と異なって、実在価値を表示せず、たんに資本の増減を生ぜしめる名目的な原因事項を記録するために設けられる勘定であるにすぎないからである」<sup>3)</sup>（谷端長）。

「企業に属する実在価値を示す実在勘定に対するもので、実在価値が増減する原因、種類、内容を名目的に示す勘定である。具体的には、損益計算書勘定すなわち収益勘定および費用勘定がそれである。収益および費用を、営業過程における資本の増減原因と考えると、収益勘定および費用勘定は資本勘定に従属するもの<sup>4)</sup>と考えたくなる。しかし、資本勘定は実在勘定であり、その点は明確に区別せねばならない」。

「収益勘定および費用勘定は、資産勘定、負債勘定および資本勘定より後に複式簿記機構に加えられた。対外関係の表示だけであれば、資産、負債、資本の各勘定のみで複式記入を完成することができる。しかし損益計算が必要となると、資本が増減する原因を示す勘定が必要となり、この段階で収益勘定および費用勘定が用いられることになった」<sup>5)</sup>（岡下敏）。

1) コーラー／染谷恭次郎（訳）『会計学辞典』1973年、331頁。

2) 安平昭二「名目勘定」黒澤清（編集代表）『会計学辞典』1982年、820頁（（ ）書きは原文）。

3) 谷端長「名目勘定」神戸大会計学研究室（編）『会計学辞典（第5版）』1997年、1168頁（（ ）書きは原文）。

4) 岡下敏「名目勘定」安藤英義、新田忠誓、伊藤邦雄、廣本敏郎（編集代表）『会計学大辞典（第5版）』2007年、1280頁。

5) 同上、1280頁。

「实在勘定に対比される勘定概念であり、具体的には収益・費用を記録する諸勘定をいう。……人的勘定と物的勘定を総称して实在勘定というが、これらの勘定で記録される財産変動の原因を記録する諸勘定、つまり、給料や支払手数料、受取利息などの収益・費用を記録する勘定を名目勘定という<sup>6)</sup>」(中野常男)。

あるいは「価値の入・出の原因・種類・内容など名目的な事柄を示す」とされ、あるいは「名目的な原因事項を記録する」とされ、あるいは「实在価値が増減する原因、種類、内容を名目的に示す」とされているが、そもそも「名目的」とは何か。

### 資本勘定

また、名目勘定と資本勘定の関係、資本勘定の捉え方への言及が注目される。あるいは「資本勘定の従属勘定・下位勘定である、と理解するのが一般的であるが云々」(安平)とされ、あるいは「資本勘定に従属するものと考えたくなる。しかし云々」(岡下)とされているが、果たしていずれが通説か。

「資本勘定の従属勘定・下位勘定」ないし「資本勘定に従属」とはどういうことか。例えば会計等式における勘定分類の論によれば、資本等式および貸借対照表等式にあって収益、費用は資本勘定の下位勘定と看做されることとなるが、そうした意味か。

そもそも資本勘定は实在勘定なのか。

安平においては「資産勘定・負債勘定・資本勘定が实在勘定に属している<sup>8)</sup>」とされ、谷端においても「前者(人的勘定)には、債権勘定・負債勘定・資本勘定があり、後者(物的勘定)には、債権以外の資産勘定がある<sup>9)</sup>」とされ、岡下にあっても「人的勘定には債権勘定、債務勘定、資本勘定が含まれ、物的勘定には債権勘定を除く資産勘定が含まれる<sup>10)</sup>」とされ、いずれも資本勘定をもって实在勘定と明記しているが、ただし、他方、コーラーにおいて实在勘定は「その残高が、次の会計年度に繰越される元帳勘定；すなわち貸借対照表項目；名目勘定と区別される<sup>11)</sup>」とのみ説かれ、また、中野においては「前者(人的勘定)は債権債務関係を記録する諸勘定であり、後者(物的勘定)は債権以外の……有形・無形の資産を記録する諸勘定をいう<sup>12)</sup>」とされ、意図的に避けているのか、資本勘定への言及はない。

コーラーのように「すなわち貸借対照表項目」と規定されてしまえば仕方ないが、しかし、どうして資本勘定は实在勘定なのか。实在勘定の定義は安平においては「なんらかの意味で実体

6) 中野常男「名目勘定」神戸大学会計学研究室(編)『会計学辞典(第6版)』2007年、1132～1133頁。

7) 小林伸行「形式的な勘定分類からみた複式簿記の機能」瀧田輝己(編著)『複式簿記——根本原則の研究』2007年、81～82頁。

8) 安平昭二「实在勘定」黒澤清(編集代表)『会計学辞典』1982年、436頁。

9) 谷端長「实在勘定」神戸大学会計学研究室(編)『会計学辞典(第5版)』1997年、609頁。

10) 岡下敏「实在勘定」安藤英義、新田忠誓、伊藤邦雄、廣本敏郎(編集代表)『会計学大辞典(第5版)』2007年、642頁。

11) コーラー／染谷(訳)『会計学辞典』409頁。

12) 中野常男「实在勘定」神戸大学会計学研究室(編)『会計学辞典(第6版)』2007年、593頁。

をもつもの（ないし実在価値）の有高・増加・減少を示す勘定<sup>13)</sup>とされ、谷端においても「実在価値をあらわす勘定<sup>14)</sup>」とされ、岡下にあっても「企業に帰属する種々の実在価値を示す勘定の総称<sup>15)</sup>」とされ、すなわち実在価値ということらしいが、しかしながら、果たして実在価値とは何か（なお、意図的に避けているのか、中野は実在勘定の定義を示していない<sup>16)</sup>）。

ちなみになお、「ただ稀には、債権以外の資産勘定すなわち物的勘定だけを実在勘定という場合や学者もある<sup>17)</sup>」とも、あるいは「ときとして、債権勘定を除く資産勘定だけを実在勘定ということもある<sup>18)</sup>」ともされている。「稀には」なのか「ときとして」なのかも気になるが、それはさて置き、こうした、恐らく最狭義の「実在勘定」の意味は奈辺にあるのか。東の間、[実在 = 有形]、すなわち可視のものかとも思ったが、物財勘定（物的勘定）は「債権以外の……有価証券……のれん、特許権などの有形・無形の資産を記録する諸勘定<sup>19)</sup>」であって、むしろ、[実在 = 有形]のはずもなく、「債権以外の資産勘定」を一つの範疇とすることの意味はやはり分からない。（いま一度）ちなみになお、「可視」ということについては名目勘定を「眼には見えない損益要素（生産要素<sup>20)</sup>）」とし、実在勘定をもって「眼に見える財産要素<sup>21)</sup>」とする向きもあり、この向きにおいては「実在勘定は眼に見える財産変動の「結果」を表現し、名目勘定はその背後に存する眼には見えない「原因」を表現する<sup>22)</sup>」とされているが、むしろ、これは「可視」の意味を異にする。

閑話休題。資本勘定は実在価値（とやら）を表しているのか。果たして実在価値とは何か。「実在価値」において「実在」と「価値」はいずれが主役か。概して「名」のvs.は「実」であって、したがって、「名目」のvs.は「価値」ではなく、「名目」のvs.は「実在」となろうが、さすれば名目はすなわち非実在ということか（これについては後述）。

しかし、やはり実在価値とは何か。価値が実在する、価値がある、ということか。そもそも「価値<sup>23)</sup>」という概念は胡散臭い。

他方、例えば斎藤静樹によれば、「文献上……名目勘定は資本勘定を含まない利益の勘定とさ

13) 安平「実在勘定」436頁（（ ）書きは原文）。

14) 谷端「実在勘定」609頁。

15) 岡下「実在勘定」642頁。

16) なお、中野は下記の大部（500頁超）のテキストにおいて実在勘定および名目勘定について説いている（7～9頁）が、しかし、ここにあっても各勘定の定義はなく、資本勘定への言及もない。

中野常男『複式簿記会計原理（第2版）』2000年。

17) 谷端「実在勘定」609頁。

18) 岡下「実在勘定」642頁。

19) 中野「実在勘定」593頁。

20) 全在紋「『複式簿記』認識の時代錯誤について」『桃山学院大学経済経営論集』第62巻第4号、2021年、120頁（（ ）書きは原文）。

21) 同上、120頁。

22) 同上、120頁。

23) 例えば下記のことを参照。

白木俊彦「複式簿記と測定原則」瀧田輝己（編著）『複式簿記——根本原則の研究』2007年、130～131頁。

れることが多い。さりとて正味資産である資本勘定が実在勘定に含められるわけでもない<sup>24)</sup>とされる。

### 名目勘定の意味

概して名目勘定は原因を表すとされ、名目勘定をもって二面的把握（複式簿記の要件）が成立するとされ、例えば次のようにもいわれる。

「単式簿記なら、ビジネスにおける損益の「結果」しか分からない。しかし、複式簿記なら損益の結果のみならず、その「原因」まで明らかとなる。複式簿記により示される数値を読み取れば、ビジネスの成功は間違いない。失敗しそうな時も、逃げ遅れないですむ<sup>25)</sup>」。

原因をもってどうして「名目」と称するのか。むろん、「名目」の語には表面上・表向きの理由、口実といった意味もあり、「理由」は「原因」に近くもあるが、けだし、「名目」の意味は「表面上・表向き」にこそある。名目勘定の「名目」は果たして「表面上・表向き」か。さに非ず、ということなら、やはり実在に非ずゆえの「名目」か。原因ゆえの「名目」ではなく、実在に非ずゆえの「名目」か。

原因については次のようにもいわれる。

「複式簿記と単式簿記との最も基本的な相違は……「財産の変化が他の変化と無関係に独立に記録されるか、あるいは、因果関係<sup>26)</sup>によって他の変化と結び付けられるのか」（徳前元信）否かである。つまり、複式簿記とは、発生した一つの取引における財産等の増減変化を、因果関係等に基づいて、その原因や結果としての他の変化と結び付け、二面的に把握し、それに基づいて二面的な記録としての仕訳を行う技術である<sup>27)</sup>」。

徳前稿は「因果関係」としているところを引用者（岩崎勇）は「因果関係等」としている点が留意されようが、二面的把握はすべて因果関係なのか。そうであれば、[(借方) 貸金 XXX / (貸方) 現金 XXX] のみならず、[(借方) 貸付金 XXX / (貸方) 現金 XXX] も、あるいは [(借方) 商品 XXX / (貸方) 現金 XXX] も因果関係として捉えられ、すなわち商品（物財）と現金（物財）の交換もまた因果として捉えられ、すなわち商品を仕入れたことをもって現金流出の原因と捉えることとなり、したがって、名目勘定は原因を表す、といった言い様はこれがお

24) 斎藤静樹「会計測定システムと名目勘定の役割」『会計』第198巻第2号、2020年、84頁。

25) 全在紋「複式簿記の文脈的意義について」『桃山学院大学環太平洋圏経営研究』第22号、2021年、21頁。

26) 徳前元信「複式簿記の基礎的考察——会計と簿記の関連性から」『会計』第192巻第3号、2017年、18頁。

27) 岩崎勇「簿記の意義と特徴」岩崎勇（編著）『AI時代に複式簿記は終焉するか』税務経理協会、2021年、5頁。

よそ無意味となる。

もっとも下記のような史実に鑑みれば、名目勘定は原因を表す、という説明は単なる後付けに過ぎないということか。

「それが誕生した当初、否18世紀に至っても、かかる勘定（名目勘定）群は、「人名勘定」と「物財勘定」だけでは足りない相手勘定を補い、貸借同一金額による「取引」の完全な貸借複記を可能とするための「仮想勘定」（または「擬制勘定」と位置づけられていたにすぎない<sup>28)</sup>」。

ただまた、他方、この「仮想勘定」（ないし「擬制勘定」）はこれを埋め草（余白を満たすもの・空いたところや欠けたところを埋め補うもの）として捉えることができ、しかし、埋め草はやがて摘要欄（取引の内容が分かるように記すメモ書きの欄）のような役割を担うに至った、という理解はどうか<sup>29)</sup>。そうした場合にも後付けということになるのだろうか。

あるいは、名目勘定が何かを表す、といったことにはおよそ言及することなく、「名目勘定」という呼称について次のように説く向きもある。

「以上の手続き（損益勘定への集約・整理）の結果、いっさいの費用勘定と収益勘定、さらにまた損益勘定と繰越利益勘定とは、それらの残高がけつきよくは未処分利益勘定に振り替えられ吸収されてしまうところから、次期に残高を繰り越すことなく、いったんは自動的に消滅<sup>30)</sup>してしまう運命のもとにある。それらの勘定を名目勘定とよぶことがあるのも、そのためである」。

そういえば、コーラーにおいても「その勘定残高が各会計年度末に留保利益へ振替えられる勘定」とされていた。

また、（叙上のように後付けに過ぎないかもしれないとはいえ）概して原因を表すとされる名目勘定ながら、ときに必ずしも原因に限られることはなく、先に引かれた辞典の類いにおいても「価値の入・出の原因・種類・内容など名目的な事柄を示す」（安平）とされ、あるいは「实在価値が増減する原因、種類、内容を名目的に示す」（岡下）とされ、これらには前述の「摘要欄のような役割」に近いものがあり、なおまた、岩崎によれば、下記のように「純資産（資本）の内訳勘定」ともされる。

28) 中野常男「複式簿記の基本構造とその成立過程」中野常男（編著）『複式簿記の構造と機能——過去・現在・未来』2007年、9頁（二つめの（ ）書きは原文）。

29) この辺りは木村太一氏（多摩大学）との議論に負っている。

30) 山榭忠恕『複式簿記原理（改訂版）』1976年、208頁。

「この場合（複式簿記の場合）、すべての取引を網羅的に帳簿に記入するための受け皿として……实在勘定である貸借対照表項目勘定（資産・負債・純資産項目勘定）と、純資産（資本）の内訳勘定である名目勘定としての損益計算書項目勘定（収益・費用項目勘定）の双方が必須なものとなる<sup>31)</sup>」。

「純資産（資本）の内訳勘定」という捉え方には前出の「資本勘定の従属勘定・下位勘定」ないし「資本勘定に従属するもの」に通ずるものも看取されようが、「資本勘定の従属勘定・下位勘定である、と理解するのが一般的であるが」とした安平も、あるいは「資本勘定に従属するものと考えたくなる。しかし」とした岡下も、資本勘定はこれが实在勘定であることをもって資本勘定への従属を否定しており、他方、岩崎は純資産（資本）を实在勘定と捉えつつ、名目勘定を「純資産（資本）の内訳勘定」としている。

ちなみに、純資産については、そもそも純資産は勘定に非ず（純資産勘定というものがあるわけではない）とし、したがって、純資産は实在勘定に非ず、とする向きも存するが、しかし、この向きの吟味は、そもそも何をもって勘定とするか、の論を俟たなければならず、まずはさて置く。

他方、差額であることをもって、实在勘定に非ず、とする行き方はどうか。資本ないし純資産は差額だから实在ではない。差額にして实在たりうるのはあくまでも借方（に实在する純資産）であって貸方は实在に非ず、とする行き方はどうか。

他方、資本をもって实在勘定と認める行き方としては、負債と同等視する、というものが考えられようが、ところで、そもそも負債はどうして实在勘定なのだろうか。負債はマイナスの实在価値、ということか。「資本勘定は資産と同じく財の勘定であり、負債と同じく消極財の勘定である<sup>32)</sup>」といった捉え方か。実体・名目二勘定系統説を説く安平によれば、実体勘定（实在勘定）は価値を示すものにしてプラスの価値を示すものとマイナスの価値を示すものから成り、後者は将来において貨幣・財貨・用役の出をもたらすものに関する勘定とされ、具体的には負債勘定と資本勘定が挙げられる<sup>34)</sup>。あるいはまた、債権債務の備忘記録たる人名勘定がまずあった、というだけのことか。債権債務の備忘記録たる人名勘定がまずあって、次いで生成をみた物財勘定とともに括られた、というだけのことか。<sup>35)</sup>

ちなみに、人名勘定といえは、勘定の分類において「人名勘定 vs. 非人名勘定」という捉え方を<sup>36)</sup>する向きもあり、この場合、非人名勘定は物財ならびに費用および収益の勘定から成り、すなわち如上の括りはない。

31) 岩崎「簿記の意義と特徴」4頁（二つめ以降の（ ）書きは原文）。

32) 斎藤「会計測定システムと名目勘定の役割」86頁。

33) 石田万由里「安平昭二と実体・名目二勘定系統説」上野清貴（編著）『日本簿記学説の歴史探訪』2019年。

34) 同上、210頁。

35) 注記29)に同じ。

36) 井上達雄『例解会計簿記精義（新版）』1976年、31～32頁。



### 「名目」の意味と対概念

いまさらいうまでもなく、实在勘定と名目勘定は vs. の関係にあるものとして捉えられているが、前述のように、实在の vs. は非实在であることから、「名目」は非实在を意味すると捉えると、例えば、純資産も名目ではないか、ともされよう。前項に言及されたように、「純資産」はあくまでも差額概念であって、したがって、純資産は非实在、すなわち名目、ということである。

しかし、概して名目勘定は原因を表すとされる。しかし、实在の vs. は原因ではなく、また、原因の vs. は結果だろう。

表1 「名目」の意味と対概念

	「名目」の意味	対概念	vs. 関係
①	非实在	实在	非实在勘定 vs. 实在勘定
②	原因	結果	原因勘定 vs. 結果勘定

表1の①と②はいずれが適当か。言葉としては非实在をもって「名目」と称することには余り違和感がなく、したがって、①の場合には「名目勘定 vs. 实在勘定」にも余り違和感がないが、一方、原因を「名目」と称することには抵抗がある。前述のように、「表面上・表向き」が引っ掛かる。

例えば純資産は「名目 = 非实在」とした場合には名目となるが、「名目 = 原因」とした場合には名目とはならない。差額としての純資産は「名目」と称されるに相応しくもあるが、純資産を積極的に捉えてその中身をみれば、払込資本は、前述のように、これを負債と同等視する、という行き方がもたらされ、すなわち払込資本は借入金と同様、債務として捉えることができ、したがって实在として捉えられる。

ちなみになお、会計主体論と関係付けていえば、「資産 - 負債 = 資本（純資産）」という資本等式が採られる資本主説の場合、純資産は差額として捉えられようが、他方、「資産 = 負債 + 資本」という貸借対照表等式が採られる企業主体説の場合、払込資本も借入金も同様に捉えられよう。

一方、②については、貸借対照表項目は結果勘定、損益計算書項目は原因勘定、とすれば、すっきりと落着はする。

### 斎藤の説

以上、本稿は名目勘定の意味について思量し、また、資本勘定をもって实在勘定とする向きを些か否定的にみてきたが、他方、資本勘定を名目勘定とする向きもないわけではない。

例えば既出の斎藤によれば、まずは「識別可能な財のクラスと対応する……勘定を、实在勘定と呼ぶ<sup>37)</sup>」とされ、「一つの取引を構成するフローの測定値が相殺しあって差額を残さなければ、

37) 斎藤「会計測定システムと名目勘定の役割」84頁。

その取引の实在勘定データも正負が均衡して完結し、利益や資本に影響を及ぼさない<sup>38)</sup>が、「しかし均衡せずに差額が残る取引では云々<sup>39)</sup>」とされ、そこに名目勘定の役割があるとされる。すなわち「この勘定（名目勘定）は取引の实在勘定データが生み出した不均衡の正負を逆にして吸収し、取引ごとに測定値を均衡させる<sup>40)</sup>」とされ、かかる測定値の均衡はこれを「貸借同一金額」と換言すれば、前出の「貸借同一金額による「取引」の完全な貸借複記を可能とするための「仮想勘定」といった捉え方と大差なくもみえようが、しかしながら、この「この勘定は……取引ごとに測定値を均衡させる」という件は「均衡させるとともに<sup>41)</sup>云々」と続く。いわく、「均衡させるとともに、正味資産の変動を複式記録のシステムに顕在化させて利益を資本と切り分ける操作を可能にする<sup>41)</sup>」。

しかし、前に引かれたように、「文献上……名目勘定は資本勘定を含まない利益の勘定とされることが多い」とされ、しかし、これも前に引かれたように、「さりとて正味資産である資本勘定が实在勘定に含められるわけでもない」とされ、「名目勘定は利益と資本を包摂しながら、両者を区分して利益を測定する勘定でなければならない<sup>42)</sup>」と結ばれる。

敷衍するに、斎藤においては「測定の道具となる实在勘定と、測定の対象をとらえる名目勘定<sup>43)</sup>」といった捉え方がなされ、「利益や資本という観察不能な量的概念が、測定可能な資産・負債のフローやストックと結びついて操作性を付与されてい<sup>44)</sup>」るという点が留意され、かくて斎藤は名目勘定軽視の現況をもって問題視している。

### 「名目勘定」のレーゾン・デートル

思量すればするほど、「实在勘定」および「名目勘定」の名をもって〔实在勘定 vs. 名目勘定〕と捉え、分類することの意味が分からなくなってきた。

「貸借対照表項目勘定」および「損益計算書項目勘定」の名をもって〔貸借対照表項目勘定 vs. 損益計算書項目勘定〕と捉え、分類し、前者は結果を表し、後者は原因を表す、とすればよいだけのことか。「实在勘定」および「名目勘定」の名をもってする分類は捨てることができるものか。ただし、例えば「例えば、「実体勘定・名目勘定」という分類と「ストック勘定・フロー勘定<sup>45)</sup>」という分類とは、異なった視点に基づく分類であることは明らかである」ともいわれるように、〔实在勘定 vs. 名目勘定〕と〔貸借対照表項目勘定 vs. 損益計算書項目勘定〕は意味をもって同じくしない。

会計学が長く（それなりに）拘ってきた〔实在勘定 vs. 名目勘定〕をもって捨てることは斯学

38) 同上、84頁。

39) 同上、84頁。

40) 同上、84頁。

41) 同上、84頁。

42) 同上、85頁。

43) 同上、88頁。

44) 同上、87頁。

45) 小林「形式的な勘定分類からみた複式簿記の機能」77頁。

の何かを捨てることになるのか。

いずれにしても、けだし、存在するものにはおよそ（いや、必ず）何かしらのレーゾン・デートルがある。

「名目勘定」という概念のレーゾン・デートルは奈辺にあるのか。

そもそも分類とは何か。分類というものの意義から再考すべきだろうか。<sup>46)</sup>

## 文 献

- 全在紋「『複式簿記』の文脈的意義について」『桃山学院大学環太平洋圏経営研究』第22号，2021年。  
 全在紋「『複式簿記』認識の時代錯誤について」『桃山学院大学経済経営論集』第62巻第4号，2021年。  
 井上達雄『例解会計簿記精義（新版）』白桃書房，1976年。  
 石田万由里「安平昭二と実体・名目二勘定系統説」上野清貴（編著）『日本簿記学説の歴史探訪』創成社，2019年。  
 岩崎勇「簿記の意義と特徴」岩崎勇（編著）『AI時代に複式簿記は終焉するか』税務経理協会，2021年。  
 小林伸行「形式的な勘定分類からみた複式簿記の機能」瀧田輝己（編著）『複式簿記——根本原則の研究』白桃書房，2007年。  
 コーラー（Eric L. Kohler）／染谷恭次郎（訳）『会計学辞典』丸善，1973年。  
 中野常男『複式簿記会計原理（第2版）』中央経済社，2000年。  
 中野常男『複式簿記の基本構造とその成立過程』中野常男（編著）『複式簿記の構造と機能——過去・現在・未来』同文館出版，2007年。  
 中野常男『実在勘定』神戸大学会計学研究室（編）『会計学辞典（第6版）』同文館出版，2007年。  
 中野常男『名目勘定』神戸大学会計学研究室（編）『会計学辞典（第6版）』同文館出版，2007年。  
 岡下敏「実在勘定」安藤英義，新田忠誓，伊藤邦雄，廣本敏郎（編集代表）『会計学大辞典（第5版）』中央経済社，2007年。  
 岡下敏「名目勘定」安藤英義，新田忠誓，伊藤邦雄，廣本敏郎（編集代表）『会計学大辞典（第5版）』中央経済社，2007年。  
 斎藤静樹「会計測定システムと名目勘定の役割」『會計』第198巻第2号，2020年。  
 白木俊彦「複式簿記と測定原則」瀧田輝己（編著）『複式簿記——根本原則の研究』白桃書房，2007年。  
 谷端長「実在勘定」神戸大学会計学研究室（編）『会計学辞典（第5版）』同文館出版，1997年。  
 谷端長「名目勘定」神戸大学会計学研究室（編）『会計学辞典（第5版）』同文館出版，1997年。  
 徳前元信「複式簿記の基礎的考察——会計と簿記の関連性から」『會計』第192巻第3号，2017年。  
 友岡賛『会計学原理』税務経理協会，2012年。  
 友岡賛『会計学の基本問題』慶應義塾大学出版会，2016年。  
 友岡賛『会計と会計学のレーゾン・デートル』慶應義塾大学出版会，2018年。  
 友岡賛『会計の歴史（改訂版）』税務経理協会，2018年。  
 友岡賛『日本会計史』慶應義塾大学出版会，2018年。  
 友岡賛『会計学の考え方』泉文堂，2018年。  
 友岡賛「会計と会計学のレーゾン・デートル」『企業会計』第71巻第1号，2019年。  
 友岡賛『会計学の地平』泉文堂，2019年。  
 友岡賛「会計ファームはプロフェッショナルに徹すべき」『Best Professional Firm 2020』プレジデント社，2020年。  
 友岡賛「『会計ルール弾力化』の不思議」『旬刊 経理情報』第1610号，2021年。  
 友岡賛『会計学の行く末』泉文堂，2021年。

46) 下記ものを参照。

友岡賛『会計学の考え方』2018年，123～125頁。

友岡賛「会計記録と貨幣の諸相——会計学の基本問題〔V〕(1)」『三田商学研究』第64巻第6号, 2022年。

山榘忠恕『複式簿記原理(改訂版)』千倉書房, 1976年。

安平昭二「实在勘定」黒澤清(編集代表)『会計学辞典』東洋経済新報社, 1982年。

安平昭二「名目勘定」黒澤清(編集代表)『会計学辞典』東洋経済新報社, 1982年。

2021年6月11日成稿